

# 第70回 「サンレモ」2位入賞 伊東ゆかり17歳の衝撃

今から54年前の昭和40年1月、振袖姿の少女がイタリアの観光地・サンレモで開催された国際的な音楽祭の舞台に立ちました。

地元イタリアのミルバや憧れのコニー・フランシス、ペトラ・クラーク、といった著名な海外勢を前にイタリア産の『恋する瞳』を原語で歌って2位に入賞します。伊東ゆかり、17歳の天晴れな活躍でした（そのときの優勝曲はボビー・ソロの『君に涙とほほえみを』）。

欧州旅行自体が珍しかった時代に、このニュースはラジオや新聞でもいち早く報道され、原語入りの日本語盤『恋する瞳』は同年3月の都内レコード店売り上げで、日本人の洋楽系シングル盤の第3位に早くも登場します。

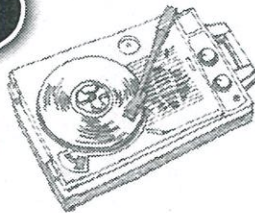
このときの第1位は弘田三枝子の『砂に消えた涙』で、これも原曲はミーナが歌ったカンツォーネであることから、当時、いかにイタリア発のポップスが日本人に親しまれていたか実感できます。

このヒットに気を良くしたキングレコードは、同じ年に『サン・レモのゆかり』と題して、伊東に全曲カ

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで

堀井六郎  
絵・松本浦



ンツォーネを歌わせたアルバムを発売。全12曲のうち、『君に涙とほほえみを』など8曲をイタリア語で収録、残りの4曲も日本語歌詞のあと、後半部を原語で歌っているのですが、いわゆるカタカナ英語のようなたどたどしい発音とは違って、違和感なく心地良く聞こえてきます。

ジャズ・ミュージシャンだった父親に連れられて5、6歳の頃から米軍基地をまわって歌っていたということですから、その頃から異国語に慣らされていたこともあるでしょうが、彼女が耳から入る音や言語を再生できる才能に長けていたことがわかります。

サンレモから2年後の昭和42年2月、伊東は『小指の想い出』の大ヒットで大人の歌手として認められ、さらに1年後、GS旋風が吹きまく

っていた時期に『恋のしずく』をリリース、同時期に発売された小川知子の『ゆうべの秘密』とともに、この年の代表曲、ピンクキーとキラーズの『恋の季節』へとつなげます。

その後も、伊東は『朝のくちづけ』『知らなかったの』、1学年下の小川は『恋のときめき』『誰もいない処』などの題名で男心をくすぐり、若い女性のマイクラブを思わせるような意味深ソングが、世の男性たちを樂しませるようになりました。

伊東は昭和47年に作曲家・筒美京平と組んで、全曲・筒美作曲のアルバム『ふたたび愛を』を発表しますが、その中に筒美が小川のシングル盤として提供していた、お気に入り『愛こそいわずに』が収録されています。

小川と伊東の歌唱を聴き比べると、歌に対する二人の姿勢が見えてきます。男性の心に訴えかけようとする小川と、自分に言い聞かせようとする伊東。女優志向のあった小川が物語を劇的に歌おうとしているのに対し、耳に訴える伊東の歌は、言葉をじっくり聴かせることで静かに胸に沁み込んできます。